

アーティスト/加賀城

抱きしめて



おっさんズ*ラブ
春田×牧

R-18

抱きかかえ

加賀城

おっさんズ*ラブ
春田×牧

R-18

びいきゅん。



俺と春田さんは両想いになった

ちよ！待って！
あれ？
おかしいな…

最近してなかったから…
うまく勃た…ねえ…
…や…

初めてのセックス

じゃあ…
又…
俺が口で…

いいよ
もう！

又…次に
しようぜ
牧…

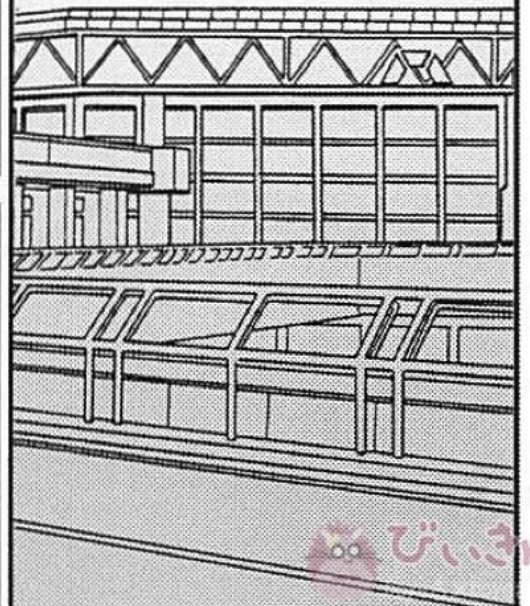
俺…
そこまで
がっつかなくても
いいし

失敗した…

あ…
はい…



そのまま
春田さんは
上海に旅立った



びいさゅん。

遠距離で
寂しいと
思っていたけど
……

まきき
今日お前
カレーなの？

文明の力で
俺達は結構
有意義に
過せていた

そうですよ
今日は
チキンカレーです
美味しいですよ

春田さんの
今日の晩飯？

……
コンビニ弁当に
決まってるんだろ

あゝあゝ
牧のカレー
食いてゝよ

春田さん
拗ねてる……
かわいいw

そんな事
云ってないで
たまには
自炊して下さいよ





遠恋でもこの調子で上手くやって行ける
…そう思っていたのに





誘って
良かったのか？

大丈夫です
ちゃんと
了承貰ってますから

飯くらいはいいけど
早く帰って来いよ！
帰ったら
直ぐ電話しろよ！

春田のやつ
案外
心が広いんだな



……
そうですね



りよした…

お前…何か
悩み事でも
あるのか？



悩みなんか
ありませんよ！

政宗が
羨むくらい
俺達ラブラブ
なんだから

カッ！



朝だって
俺が電話で
起こしてやって…

凌太！

俺達毎日電話で
話してるんですよ
ゆるめしだって
時間合わせて
一緒に食べてるし



お前ら
ちゃんと
セックスしたのか？





不安で仕方ない



こんなに
毎日声を
聞いているのに



凶星だった

おい！凌太！

体の繋がりが無い事が

牧！お前！
何やってんだよ！
まだ家帰ってね？

春田さん

何処居るんだよ今！
まだ武川さんと
一緒なのか？
何時迄ふらふら
してんだよ
さっさと帰れ

…おい？牧？
どしたんだよ？
武川さんと
何かあったのか？
………牧？

………

………



牧？
お前どしたんだ？
何かあったのか？

？…泣いてんの？

泣いてねえし

泣いてる
じゃないか…？

アンタ！見えないだろ
俺が今どんな顔
してるかなんて…

ほっといて
下さい！



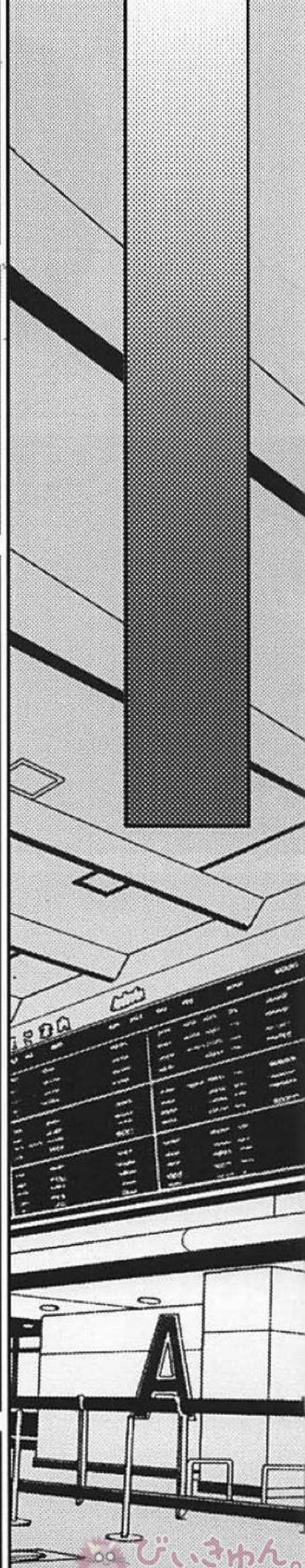
うるさい！

何もねえよ！















牧…
すぐ…
抱きたい



必要ねーよ

…あ！



あ…
じゃあ
俺口でします



ずっと…
お前としたくて
たまらなかった

春田さん
すげー
勃ってる

春田さん…



ごめん
嘘ついてた…



ほんととは
すげえ
がつついてる
…俺



お前とちゃんと
セックス
したかった



抱きたい！
…な…牧



俺だって…

ずっと
春田さんと
したかった…
んだから！

ちよ！

待って！
もういい…
から

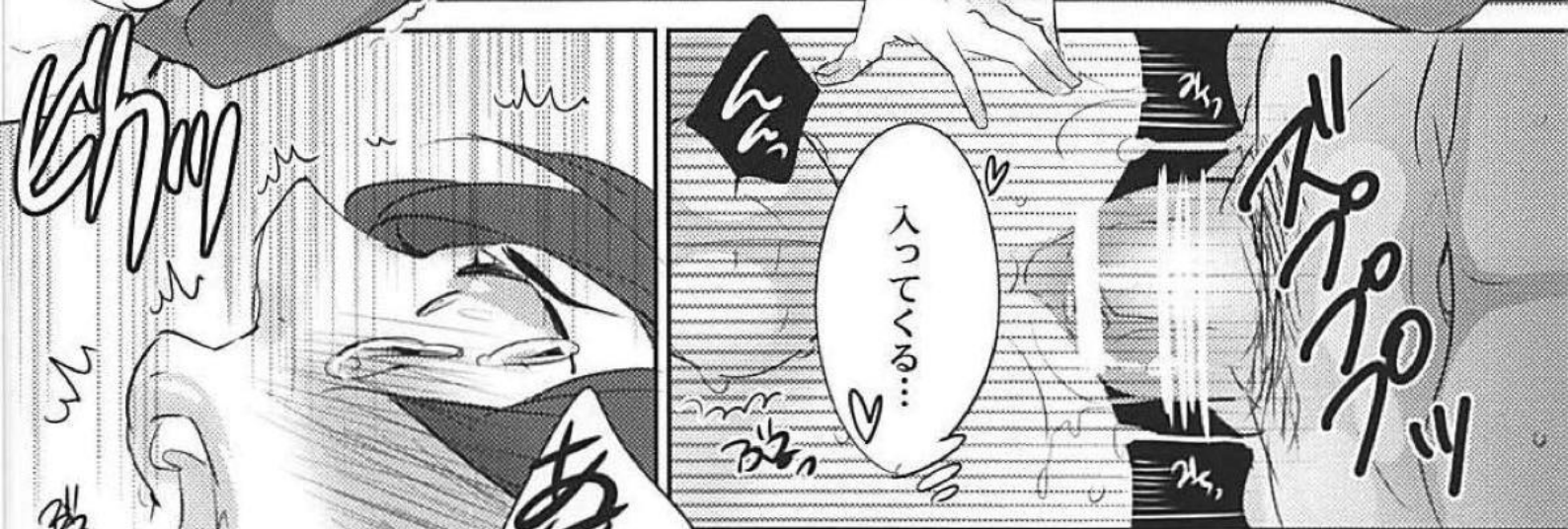
そこ
ばっかり
じゃなくて…
早く…



…ん…

…じゃあ…
挿れるぞ！

………
春田さんのが



入ってくる…



あと！ちよつと
このまま
奥挿れても
大丈夫か？

それじゃあ！

全部…
入ったよ！
まゝき

あ…ん…
ん…だいじよ…ぶ
だとおも…う



これで
全部
俺のモノだ…

だまそうて。

明日仕事だから
もう上海に戻る？

休み取ったから
帰って来たん
じゃないんですか？



END

ダブルベッドを買いました。

高柳 Kei

Info:Twitter@keitmos

「謝謝依」

運転手から釣りを受け取った春田の中国語は意外なほど滑らかで、オレンジ色の車内灯に浮かぶ横顔は記憶より引き締まって見える。開いたドアから流れ込む湿気のこもった空気は微かに甘く、春田の背中越しに見える景色はぼんやりと夜色に染まっていた。

「ほら、牧」

先に車を降りた春田が手招きする。促されるまま手を取ると、思うより強い力で引き寄せられた。そうして降り立ったのは外灘からは少し離れた路地にあるモダンな5階建アパートメント。夕食に立ち寄った食堂からそれほど距離はないのに、先刻までの賑々しい喧騒は遠く、通りはひっそりとしている。頬を撫でてゆく風もからりとして馴染んだ浜風とは違う。一月ぶりに会った春田の顔は浅黒く日に焼け、記憶していた彼と少し違っていた。

調整を重ねて手に入れた週末二連休を利用して、上海に降り立ったのは数時間前。金曜の仕事上がりにそのまま空港に直行し、上海まで概ね三時間のフライト。移動時間は国内旅行とさほど変わらないけれど、やはり異国である。白檀の香りに浅黒い肌、早口の中国語、整備された街の一角にところ狭しと並ぶ屋台。長らく上海は横浜と友好都市関係を結び、共通項の多い都市と言われているものの、こんな夜更けでは知りようもない。夜間に浮かぶ高層ビルのイルミネーションは美しいが、特に胸に迫るものでもなかった。そういえば明日、街を案内してくれると春田が言っていたから、追々わかるだろう。初め

て訪れる国だというのに、なにも知らずに来てしまったのだと今更ながらに牧は気がついた。春田の少し眠そうな奥二重や巻きの強いくせつ毛、厚みのある手のひらやおっとりした声色ばかりが頭に浮かんで最低限の準備しかしていない。そのくせ、春田が喜びそうならやの栗羊羹だの御門屋の最中などはしっかり買い込んできている。どうもだいぶん、舞い上がっているらしい。牧は自身をそう判断した。

それとは反対に久しぶりの逢瀬にもかかわらず、春田は落ち着いていた。仕草の中にも大人の男らしい安定感が感じられて、突然八歳の歳の差を意識させられる。勧められるままに雪花ビールを飲んだせいか、頭がぼうつとして、ここが上海であるという実感が今一つない。高揚と緊張とを綱い交ぜにしたような不思議な感覚が牧の身体を満たしていた。

オレンジ色の常夜灯の下、長く伸びた影をぼんやりと見ていた牧の目を

「やっぱ、疲れた？」

と、苦笑を滲ませた浅黒い顔が覗き込んできた。疲れてはいない。夢の中のようにつわつた気分で心地よかった。

「いえ…ちよつと飲みすぎたかもしれませんが…疲れてはいませんよ」

「そんなに飲んだっけ？」

春田の声も甘く、心地よく響く。

「ここが春田さんの住んでるところですか…」

春田の今の住まい。でもここは借りの住処でいずれば彼は自分のところに戻ってくる。単身赴任中の家人を待つ身になろうとは、数か月前

には考えられなかったことで、本当に世の中どうなるものか分からない。

「そうそう…外からは綺麗だけど、中はけっこう古くてさ…こつちの内装の素材って独特なんだよ」

驚くなよと言いつつ外からまた腕を引かれた。

「でもまあ職場まで徒歩十分…しかもトイレとバスはリニューアル済みだから、文句は言えないか…」

どうせ寝に帰ってくるだけだしと独り言のように続けた春田は同じくらい飲んだのに、なんだかしんとして、軽々と牧のスーツケースを持って歩く。シンプルな白い照明が灯る廊下はし字に伸び、角を曲がって一番奥の突き当たりが春田の部屋だった。

「ちよつと待って」

慣れた手つきで暗証番号を押す。カチャリと軽い音がして、春田がドアを開けた。中は薄暗い。玄関から続く奥の部屋は更に暗く、中の様子はまるでわからなかった。

春田が壁に手を伸ばすと玄関から部屋に向かって淡い照明が灯る。中に入ると後ろでゆっくり扉が閉まった。オートロックだから、施錠の必要はない。

「おじゃまします…」

儀礼的に小さく言った矢先、突然身体ごと引き寄せられた。あ、と思う暇もなくきつく抱きしめられる。

「まきい…」

湿り気の混じった声が耳に滑り込んできて驚いた。今までの落着きとは打って変わった切羽詰まったような強い抱擁だった。長い腕が強くきしむほど抱きしめてくる。思いがけない唐突さにくらくらしながら応えるように牧もそろそろと背中を抱き返した。

「会いたかった…すっげ、会いたかった」

「…俺もです…」

「……………うん……」

抱きすくめられたまま、髪や耳や首筋に唇が忙しく触れてきて、息が苦しくなる。

「っ…春田さん、俺も…」

相手に触れたいのは牧も同じだった。頬や臉や唇に。引き締まった胸や逞しい腕が恋しくて堪らなかった。

「う…………ふ」

食むように唇を塞がれて、息が苦しい。腰に巻かれた長い腕の熱を意識して、身体の奥に痛みのような疼きが沸き起こる。

「んん…………」

抱擁がきつくなり、春田はいっそう深く舌を絡めてきた。キスだけでは終わらない。そう予感させる接触だった。

しばらくは唇を吸い合う音と、抱きしめる腕が互いの身体を這う衣擦れの音しかなく、次第にそこには甘く鼻にかかった牧の喘ぎ声が混せ込まれる。

「あ……………はる、たさん…」

肌が痺れて眩暈がする。力の抜けそうな身体を逞しい腕が難なく支え、頬にも耳朶にも唇が下りてきた。

耳の縁をゆつくりと辿るように這う唇の感触がたまらない。簡単に息が上がってしまつて肩にしがみつくと何度も濡れた音をたててそこに口付けられた。

「…っ…」

薄い柔らかな耳朶をたわめられる感触とその音に煽られて、びくび

くと身体が跳ねてしまう。

「……痛い？」

問う声にかぶりを振って、けれど本当は自分でもよく分からない思う。破裂しそうに鼓動は早く、背筋はぞくぞくするすし、身体はひつきりなしに震えて泣きそうな気分になる。交互に起こる疼きと、戦きは痛みにも似ている。

「……………いたく…ない」

だが、どうあつても違ふのは、どこまでも熱くなつていく肌と、触れた指先から起る甘いような痺れだ。服の上から牧の身体のラインを確かめる手のひらの動きは既に愛撫と変わらない。

「ン…………っ」

じんわりとした熱が腰の奥を騒がせ、足から力が抜けていく。首筋を吸い上げられて、堪らず春田の首にしがみついた。

すっかり馴染んだ抱擁に取り巻かれ、気がつけば春田の胸に抱きこまれたままベッドの上に転がされている。

「牧…」

熱を帯びた声の春田の、長くて形の良い指が、牧の乱れた黒い前髪を梳き上げ、その接触にようやく状況の変化に気づいた。

春田の瞳からの切羽詰まつたような視線を受け止め、体の奥がざわざわと騒いだ。

「…こんなつもりじゃなかったんだけど……………もう我慢とか無理…」

苦笑を浮かべた春田がゆつくりと覆いかぶさってくる。焦れる男の性を逸らすつもりは牧にもなかった。ここで止めると放り出されて、どうしろというのだ。

「…このまま…していい？」

やめる気など毛頭ない欲望を押し殺した低い声で、耳朶を噛まれ、

「俺…汗かいて、埃っぽいけど…」
なんとか返すと

「全然気にならない…そっちの方が興奮するかも」
さらりと言って春田は笑った。

身の置き所のないような戦きは、最初の頃のように勢いのまま寝た時とは違う。覆いかぶさってくる春田の胸がもう裸で、包まれる気配の濃厚さに、これだけでどうにかなりそうだと牧は身体を振った。

「…や、じゃないよな？」

声色ほどにやわらいではない春田の視線にぶつかり、両腕を掴まれて唇を塞がれた。何度も角度を変えては吸われて、押さえつける必要もないほどあつさりと身体の力は抜けてしまう。耳の下の柔らかい皮膚に痛みが走るほど強く吸われて、ひくんと反り返った腰を抱かれた。

「もう、ずっとずっと触りたくて…堪えなかった」

頼りないような声色なのに春田の動きに迷いはなく、すぐにチノパンの中に手のひらが侵入してくる。

「…あ…っ」

脇腹を何度も撫でられ、形を確かめるような所作に牧は息を飲んだ。

春田とはまだ数えるほどしかセックスしていない。けれど、相性が良いのは疑いようもなかった。男を抱いたことなどないはずなのに、そうと意図せず触れられた指ですらひどく心地良い。裸で抱き合うだけで、身体の芯から陶然とするような愉悅を覚え、戸惑うほどだった。

た。それほどまで身体の合う相手がいること、それが春田だったというのは、牧にとっても予想外で、上海に出張するまでの僅かな間、二人は熱に浮かされたように肌を重ねたが、いかんせん時間が足りなかった。

サマーセーターをたくし上げる春田の手のひらの動きが次第に大胆になり、肉の薄い胸が鼓動に合わせて上下しているのが自分でもわかった。

「ホントはさ、空港に迎えに行つた時から牧に触りたくて、ぎゅってしたくて…でも、そんなにガツガツしたら呆れられるかなって…」

言いながら長い指の先で真ん中をそつとなぞり上げ、不意打ちで胸の先をきゅつと吸われる。

「ああっ！」

仰け反りはなつた声があまりに卑猥で牧は反射的に口元を手のひらで塞いだ。欲望を隠さない春田に唇に挟まれ、舌先に突かれて、堪えてもくぐもつた声が零れるのを押さえられない。

「呆れたり…なんか…んっ」

春田が言っているのは、出発の日、家を出るギリギリの時間までセックスしてしまつたことだろう。セックスはお互い同意の上で成り立つものだから、牧が拒めば成立しないわけで、特に気にも留めてなかったのだが、春田には思うところがあつたらしい。

「だってさ、あんなにしたのに、またかつて思われるんじゃないかなって…」

「…それは…さすがに、空港から即って言われたら…引くかもしれないですけど…」

「だから、こつち来てくれたら、焦らないで…牧にゆつくり寛いでも
らわないと…そう思ってたけど…ダメだった」

「んー！」

春田の唇が再び胸の先端を捕えた。胸を構われているだけなのにひ
どくつらくて、自然に浮き上がった腰が春田の足に触れる。

重なり合い押しつぶされた身体の間では、じんわりと熱くなった牧
自身が形を変えはじめていた。密着したままで誤魔化しもきかず、長
い脚を挟み込む体勢も気恥ずかしいのに、この腕をほどいて欲しく
ない。

「……つく、ふ」

気持ち良いかと問われ、素直に頷いた。身体が馴染んでいる。そうと
しか言いようがない。

たぶん、春田も牧と同じように感じている。そうでなければ、ノーマ
ルだった彼が男相手に三日と置かず求めたりはしないだろう。

経験値は上回っているはずなのに春田の躊躇いのない積極的な接触
と熱心さにあつという間に翻弄されている自分が信じられない。こ
と仕事面での春田の美点である真面目さや相手を思いやる誠実さ、
粘り強さがまさかベッドの上で発揮されることになるとは思いまし
なかった。

弾む鼓動に堪えて縋り付けば同じ強さで抱きしめてくれる腕に胸が
熱くなる。口付けられながらそつと脚を撫でられ、そのままずりりと
下肢を暴かれて震えた舌を、大丈夫、というように優しく何度も甘が
みされる。

「あ……あ……」

じんわりとした熱が春田の触れた場所から一ヶ所に集まり、そこか

らまた全身に散らばって、ふわふわと身体が浮き上がるような錯覚
を覚える。こんな感じ方も春田に教えられた。

肌の上を絡んでぬめる春田の舌に濡らされ牧は身悶えた。

「……っ！あ、あっ」

身体の奥から湧いて流れそうな感覚を緩やかに与えられて、それな
のにどんどん切羽詰っていく。春田は張りつめて充血する胸の小さ
な突起を舐めあげて、ゆつくりと重ねあつた腰をゆすつてくる。春田
の長い脚の間にあるものが押し当てられ擦れあう刺激に思わず腰を
引けば、そのたびに追いかけられ引き寄せられる。

「うっ……うっ……うっ……まだ……」

「ダメ？」

本当に？と性質の悪い声で問われ、耳に吹き込まれた吐息交じりの
それにぞくぞくと背中中に痺れが走った。弱くかぶりを振ってみせて
も、本当は嫌じゃないから、困る。春田の指先が直にセックスに触れ、
牧はくたくたと沈み込んだ。

「あ、んっ……も……っ、んっ！」

過敏になった胸の先をしつこく舌に苛められて、それだけでも辛い
のに意外なほど器用な指が濡れた音を立てて絡んでくる。痛まない
ようにやさしく、それでいて容赦ない手つきは簡単に牧を追いあげ
て、堪えても堪えても淫らに腰がうねった。

「春田さんっ……」

唇をねだると望むままに与えられる。身体がひっきりなしに震え、そ
れでも唇の内部をかきまぜる春田の舌に、牧の意識は霞がかったゆ
く。

「ん、ふ、ん、ん……っ！」

濡れた卑猥な音の中に、くぐもった牧の甘い声が混じる。無意識に逃

げようとするのを許してもらえない。ひくひくと跳ねる脚を春田の指が捕らえた。

「んう…っ！」

ひきつるように身体が跳ねはじめる頃、濡れた音をたてて唇が離れる。食るように酸素を求める牧の様子に、春田は脚の間を探っていた指の動きを止めた。浅い呼吸を繰り返す牧を眺めおろした彼は熱のこもった吐息を落とし、

「…先に言っとくけど…絶対一回じゃ終わんないから」

空恐ろしいような言葉を口にした。

「っ！そ、んな…あっああっ！」

考える暇もなく再び緩く抜きあげられて、もうまともに応えることができない。どんどん硬く張りつめるのに溶けてしまいそう、で、混乱する感覚にかぶりをふる。ぬめる先端を丹念に擦られて、腰を大きく揺すりながら震えた牧はついに堪らず、春田に訴えた。

「っもお…大丈夫だから…それ以上はもう…」

一人で達してしまいそうだと告げれば、いいよ、と耳元で囁く声が心臓と腰を跳ね上げる。これからの身体の負担を考えれば、先に達しておいた方が楽なのは分かっている。けれどこんな風に一人で激しく追い上げられるのは浅ましい自分を見せつけるようで、苦手だ。

「…牧…？」

かち合った視線に気づいた春田に何うように覗き込まれると、牧は彼の顔色の瞳をじっと見つめ返した。息の上がつた口元がわななくのは抑えきれない。

「…きつくても…春田さんと…一緒にいたい…」

そう切れ切れに告げ、汗の浮かんだ春田の頬を掌で触れる。春田は広い肩を震わせ大きく息を吐いた。そうして熱の上がつた頬に軽く唇

を押し当ててくる。

「…わかった…でも、ちょっと慣らさないと…牧がキツイのは俺が嫌だ…」

ちよつと待って、と身体を起こした春田の手にチューブのようなものが握られていて、牧は思わず顔を逸らした。彼がこのために準備したのだと思うと恥ずかしさと居たたまれなさ、そしてやがて来る快楽への期待が一度にこみ上げてまともに春田の目を見ることができない。俯いてしまった牧に苦笑する気配がした。

「…するよ？」

すぐに腰の奥に長い指が触れてきた。

「あ……………」

ぬめったジェルの感触は少し冷たく、熱のこもった場所を開かれるのにはさすがに身体が大きく震えてしまう。久々の行為に無意識に身構える牧の入り口を掠めてはなぞり、幾度もその動作を繰り返す、ゆつくりと指が差し入れられた。

「んっ……………」

「……………痛い？」

「…へ、いき…」

ゆつくりと乗りあがってきた春田の影がひどく大きく感じられて、肌が慄く。

セックスをするなら自分の方がイニシアティブを取るもの、取らなければ成り立たないだろうと思っていた過去の自分が可笑しい。翻弄され続けて震える腕で首筋に抱きつきながら、牧は知らずに笑みを浮かべる。こうして触れ合っていられるなら、どうなっても良いとさえ思うのに。

「…なに？」

「…なんでも…ない」

膝を立てたまま汗に濡れた首筋を撫でれば、ゆっくりするからと春田が片頬で笑って見せた。

「ん……………ん、ん」

背中をしなせながら牧は喉声を上げる。急くことなく長い指は愛撫を繰り返して、ジェルを塗りこまれたそこが和らいでいく。

徐々に指が増え、確かめるような指使いで広げられていくのが、気持ちいいのか怖いのかわからない。

「んあつ…あ…んっ！」

時間をかけて慣らされ、春田の指をやりわりと飲み込みはじめたそこが牧の意思とは関係なく蠢きだして、ままならない身体が何度も跳ね上がった。

自然に浮き上がる腰が揺れて、硬い指先を奥に誘い込むような蠕動が身体の内ではじまるのがわかる。

「あつあつ…それ、だめ……………」

頭の芯が熱を持って、苦しいと喘ぐ様がどれだけ艶かしく写るのかわらないまま、汗に濡れた牧の身体は長い腕に抱かれてうねるしかない。

春田の指を含んだそこはすっかり甘く薄げ、もう焦れるような物足りなさを感じはじめている。しがみついた春田の身体も水を浴びたように汗にまみれていた。

「春田さん…はやく…っ」

きゅっつと物欲しげに指に吸い付いていく身体が止められないでもう限界だと呟いた唇をもう一度深く奪われる。濡れた舌を絡めとられ、限界まで広げられた脚の奥に待ちわびた熱があてがわれた。

「ん……………」

ゆるりと入り込んできた先端を痺れて熱い粘膜が感じ取り、久しぶりの感覚に身悶えた牧は忙しく胸を上下させた。

「……………っふ」

全てを埋め込まれ、春田がくつと息をつめたその瞬間、どくりと体内にあるものが容積を増す。

「やあつ……………な、ん……………あ、あつ！」

びくんと反射的に脚を閉じればそれは却って春田の身体を挟みつける結果になって、自分でも呆れてしまいそうな淫靡な声が零れた。しつかり腰を掴まれ、動くよと言いながらぬめる内部を擦られると、逃れる術もなく牧は大きく仰け反った。

「あう、うう……………」

身体の中のどこかに、なにかが当たる、そうとしかいいようのない突き抜ける快感に勝手に腰が揺らめく。

春田が息を呑む音が聞こえ、力強い彼の脈動が快感の高まりを伝えてくる。自分の身体に春田が感じているのが堪らない。

「牧…」

うわ言のように呟いた春田に、かき混ぜられる身体之最奥。たえまなく甘い痺れが脊髄を走り、瞳が勝手に潤んだ。

「…あ…っ…そこ…き、もち…いい…」

「……………っ？」

熱いセックスに鋭敏な箇所を小刻みに擦られ、抱えられた腰を揺らされる。春田を包み込んだ自分の身体がどんな風に蠢いているのかわかったけれど、もうどうでもよかった。

「もつと……………っ動いて……………」

もつと動いて思い切り揺さぶって欲しい。

「……………」

本能のままに春田を飲み込んだ場所をもどかしく揺すって、もつときて欲しいとしゃくり上げれば、うわ、やべ、と上擦った声を漏らした春田が牧の腰を痛むほどに掴んだ。

その一瞬あとには嘔みつくように口付けられてもう遠慮もなにもないとはかりに激しく揺さぶられる。

「すっげ…キツ…」

呻いた低い声が、自分に向けられたものなのか考える暇もなく、執拗に挿入され奥まで穿たれ、攪拌するみたいに中をぐちゃぐちゃにされた。

「あつ、あつ、……いいつ」

舌も淫らな熱も全部身体の中に入れて滅茶苦茶にされているのが嬉しい。揺さぶられる振動に上手く嘔み合わない唇から、どうしようもなく淫猥な言葉が零れる。

「も…いい、く…あつ！ああつ！」

沸点に近づく身体に間歇熱のような震えが沸き起こり、息もまともにできない。

「は、るたさんも…一緒に…んっつ！」

「牧…」

耳朵を嘔むその声と荒い息遣いがとどめのように身体を貫く電流になって、しなる腰の奥が痛いほどに春田をしめつけた。

「……ッあ、あんん！」

がくんと跳ねた身体から熱く吹き出した飛沫と同じものが体内を濡らして、息をつめた春田の背中が手のひらでうねるのを感じた。

「……う…サイコー…」

脚を絡ませ濡れた肌を擦り合わせながら、痺れるように甘美な愉悅に浸る。

忙しく乱れた吐息はすぐに奪われ、異国の夜気に飲み込まれていた。

「…で、いったい何なんですか、この馬鹿デカイベッドは…」

裸のまま隣に横たわる春田にそう尋ねたのは、窓から差し込む光で部屋中が見渡せる頃だった。

出窓に置かれた時計を眺めれば正午まであと少し。昨夜この部屋に着いたのは確か23時を過ぎたあたりだったから、ほぼ半日をベッドの上で過ごしたことになる。

春田が離してくれなかったし、自分も離れたくなかったのだから仕方がないのだが、だいぶん、疲労困憊である。水を飲みに起き上がるのも億劫なほど盛り上がってしまったのに軽く後悔を覚えつつ牧は天井を見上げた。

古い石膏ボードは日本でもポピュラーなものだが、壁には竹材に似たクロスが張られている。これが上海の定番なのだろうか。しかしして特異なのは六畳ほどの部屋に鎮座しているゴージャスなダブルベッドだった。ベッドの四方から支柱が伸び美しいレリーフが施された天蓋を支えている、ヨーロッパの高級ホテルのスイートにでも設えられているような代物である。そのロマンティックでエレガントな雰囲気、ベッドの真ん中に春田と横になっている。

彼は少し前、冷蔵庫からミネラルウォーターを持ってきてくれたので、

こちらほど消耗してないらしい。起き上がる気力がわかないので、牧は転がったまま話すことにした。

「どう考えたってサイズ感おかしいでしょ、これ」

6畳ほどの部屋の8割をベッドが占めているのだから、当然である。

「もしかして、備え付けなんですか？」

だとしたら、センスを疑う所業だが

「や…それがさ…」

も「も」こと歯切れが悪い。春田には心当たりがあるようだった。

「こつち来て部屋決めて…ちよつとした家具を買うつもりでさ、こつち作り付けの棚とか全然なくて…んで、こつちの人に家具屋さんみたいなとこに連れて行ってもらったんだけど…お店の人が日本語上手で、盛り上がっちゃって…」

うっかり日本に帰りを待ってる一ヶ月前にプロポーズしたばかりの恋人がいるのを話してしまったのだという。

「そしたら、お祝い代わりに値引きしてくれるって話になって…」

あれよあれよという間にこのダブルベッドを買うことになってしまったらしい。帰国の際にはコンバクトにして船便で送ってくれることになっていて、その手配も込みの料金だというから、売り手はなかなかの営業手腕の持ち主である。

「いくらしたんですか、これ」

「…言わなきゃダメ？」

「……………」

無言の圧力にあつさり春田は陥落する。

「…だいたい、四十五万円くらいです」

「四十五万!!!!マジか？」

反射的に突っ込んで牧は溜息を吐いた。イケヤなら十分の一の値

段で買える。

「…こんなに使っちゃったらクーリングオフとかできないですよね？」

そもそも上海にクーリングオフ制度があるものかわからない。

牧の小言を覚悟してか、神妙な顔で春田はこちらの様子を伺っている。

「こういうドラマティックな贈り物をする方が絶対喜んでくれるって言うしさ…俺、なにもしないでこつち来ちゃったし…日本に帰ったらベッドは絶対買おうと思ってて、これだったら二人でゆくり寝れそうじゃん?んで、どうせだったら、良いものの方が牧、喜ぶかなって…」

行き当たりばつたりのこの思考回路。まさしく春田創一である。昨夜の大人っぽい佇まいは幻だったのだろうか。

「二つ聞いておきますけど…こんな馬鹿デカイベッド置ける部屋って家にありますっけ？」

少しばかり投げやりに問えば

「そ、それはさ、ほら、俺の部屋の隣の納戸をばーんとぶち抜いたら楽勝じゃね?って思ってた…」

弁舌爽やかに春田応える。この能天気男、牧は密かに毒づいた。

「なんでそうアバウトな買い物するかな…」

「え?」

「…なんでもありません」

大物の家具を買うのにこんなアバウトに決められるものだろうか。こういう楽天的で無計画な所は自分とは全く違うし、心底、理解しがたい。けれど。

「…確かにドラマティックかも…」

両手両足を大きく伸ばして牧は呟いた。男二人で寝ても広々として気持ちが良い。スプリングの固さも好みだし、激しい運動にも耐えるしつかりした造りだ。

天蓋は美しい花を模ったレリーフが施され、薄物の天蓋カーテンを吊れば、さぞやロマンティックな佇まいになるだろう。春田が帰国したら、ベッドは新調しようと思っていたのだし、納戸の壁を取っ払えば、上手く収まるような気もする。そこにジャージ姿で寝転がる春田を想像すると、唇が勝手に綻んだ。

「んだよ…なに笑ってんの？」

「別に…」

自分ならもつとシンプルでモダンなベッドをきつと選ぶだろう。そこそこに無難でどこにでも馴染むものだ。だが、このベッドと比べると、それはとてもつまらない買い物のように思えた。

牧が春田を好きなのは、自分とはまるで違うからだ。不恰好に見られても揺るがない誠実な思いやりだったり、相手を選ばない人の良さだとか、飾り気のない性格に心惹かれている。

元々高級品等に執着のない彼が大枚を叩いたのは、自分を想う故であるのは疑いようもなく、しつらえも相応の上等さならもはや上文句のつけようがない。なんだかんだいっても惚れた相手に甘いのは世の常である。

「とりあえず春田さんが帰国するまでリフォームの見積もり取って、あたりをつけておきます…それで、良いですよね？」

春田の方に顔を向けると、その顔には喜色満面の笑みが浮かんでいた。

「まきい…」

結局、この男にはとことん弱いのだ。胸の奥が擦られるような感覚を隠して

「部屋もなるべく片づけておくんで、絶対にこれ以上荷物は増やさないうって約束して下さい」

努めて冷静な声色で続ける。この調子であれこれ物を増やされても困る。

「あと、湿気でカビないようにしっかり換気して…そうだな、エアコンを26度くらいでかけっぱなしにしちゃって下さい…ずつとこんな感じなら、かけっぱなしにした方がたぶん安いで…それから」

カーテンも遮光の、と続けようとして春田の腕に引き寄せられる。

「ちよ、まだ…んっ…」

問答無用とばかりに唇を奪われ、牧は早々に抵抗を放棄した。大層な贈り物を貰ったばかりで、贈り物にはお返しが付き物だ。自分自身をお返しというのは少しばかり抵抗があるけれど、春田が満足しているようなので、ここは目を瞑ることにした。

この本を一般の方や関係者に見せる事はお止め下さい。
個人的にひっそりこっそり楽しむ事をお勧めします。
ヤフーなどのオークションへの出品は一般人の目に触
れ大変危険ですので出品しない様お願い致します。

マナーを守って快適な同人生活を…
と云うか超お願いデス。

NO! T, P, NET,

Twitter@aruchihiro

E-mail:aruchisuto@hn.velvet.jp

■発行元／アルチスト：加賀城ヒロキ

■発行日／2018.08.10

■印刷所／くりえい社

無断転載禁止です。

ご自分のサイトへの掲載も許可していません。

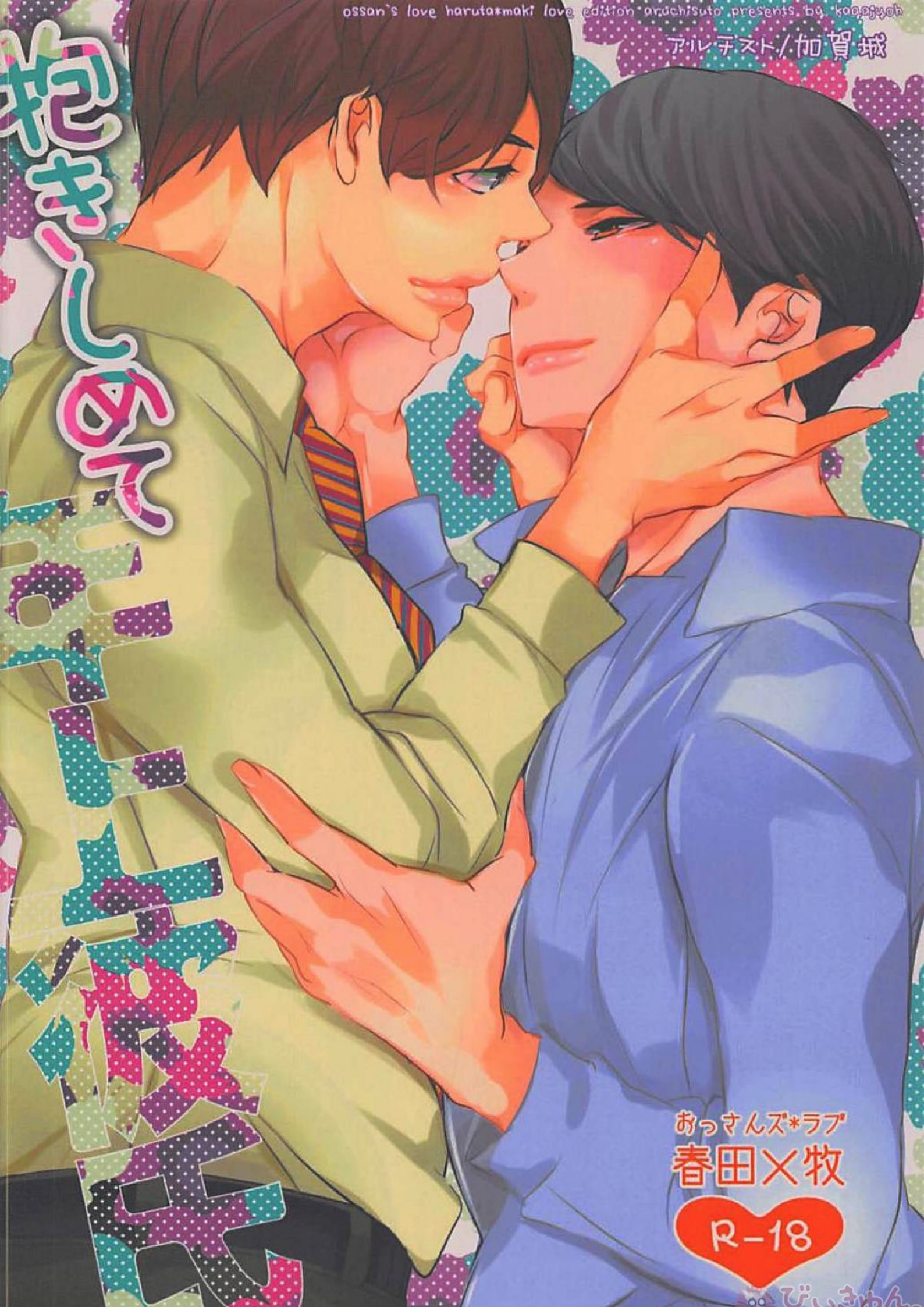
当方発行の同人誌は「同人誌無料公開の
アフィリエイトサイト」への許可は一切行なっていません。

No reproduction or republication without written permission.
Gebrauchen die Bilder ohne Genehmigung verboten.

Twitter@kagajyoh86

Pixiv=3595232

アルヂスト/加賀城



おっさんズ*ラブ
春田×牧

R-18